

瓜州トルファン人社会 (1733-1756)

—— 清の領域拡大の最前線 ——*

A Turfani Community in Guazhou (1733-1756) :
The Forefront of Qing Expansion

小 沼 孝 博

Takahiro ONUMA

Abstract This paper, using a Turkic-language document, EM 13135, kept in the Ethnography Museum in Ankara and Qing archival documents, describes the actual social conditions of the Turfani community in Guazhou and clarifies their position within Qing strategy towards the northwest.

In the early eighteenth century, the conflict between the Qing dynasty and the Junghars intensified around the eastern Tianshan region. In 1732, the Qing launched an initiative to encourage the Turkic-speaking Muslims of Turfan, who had cooperated with the Qing army, to seek refuge in Qing territory. In the following year, about 10,000 Turfanis, led by Emin Khwāja (1684/85-1777), immigrated to Guazhou in western Gansu. The Turfani refugees received from the Qing government various forms of support such as the construction of towns, the supply and loan of food, farming implements, and livestock, and the construction of irrigation channel and reclamation of waste land. Seen from the Qing point of view, there was an urgent need to develop the western Gansu region, especially the sparsely populated and least-developed *Kouwai* area west of Jiayuguan, as a supply base for the frontline of the war with the Junghars. In such a situation, the presence of the Turfan refugees fitted exactly with the Qing strategy for the northwest. The Turfani migration to Guazhou may have come about because the Qing, who wished to strengthen their defenses in western Gansu, shared a mutual interest with the Turfanis.

After the Qing successfully overthrew the Junghars in 1755, the Guazhou Turfanis were able to return to their homeland. Then Emin Khwāja and his descendants, i. e. the family of the Turfan *junwangs*, became the most prominent ruler to manage the administration of the local Muslim population in Qing Xinjiang. As the context of EM 13135 has demonstrated, the experience to migrate to Guazhou also had a great effect on their identity in this stage.

Keywords Turfan (トルファン), Guazhou (瓜州), Emin Khwāja (エミン・ホージャ), Qing (清), reclamation (開墾)

* 本稿は、Onuma 2016 をもとに改稿・増補したものであり、科学研究費補助金 (25770259) による研究成果の一部である。改稿・増補にあたっては、香港で開催された会議 “Empires of Water: Water Management and Politics in the Arid Regions of China, Central Eurasia and the Middle East (16th-20th centuries)” (Lingnan University & University of Hong Kong, 2016 年 5 月 26 日～28 日) で報告をおこない、ディスカッサントの井黒忍氏をはじめ、貴重なご意見をいただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

はじめに

河西回廊と称される甘肅西部一帯は降雨量に乏しい乾燥地域であるが、南方の祁連山脈に源を發する河川が複数存在し、その流域一帯には緑豊かなオアシスが形成された。古来、その地に生きた人々は、厳しい自然環境にありながらも、河川の水を乾いた大地に引き込み、生活空間としてのオアシスの拡大と維持に努めてきた。また、それら東西に連なるオアシスは、中国本土（漢地）と中央アジアを結ぶ内陸交易路「シルクロード」の中継地として機能し、大小無数の人間集団の流入により多様な地域像が作り上げられてきた。

18世紀前半、満洲人を為政者の主体となす清は、天山山脈の北側を根拠とする遊牧国家ジュンガルと対立を深め、天山東部地域に進出した。一進一退の攻防が続くなか、1732年から33年にかけて甘肅の瓜州に移住してきたのが、エミン・ホージャ Emin Khwāja (1684/85-1777) に率いられたトルファン出身の約1万名のテュルク系ムスリムである。本稿は、この瓜州トルファン人社会の形成過程や社会実態の解明を通じて、当時の清朝政権の西北戦略について検討するものである。

瓜州トルファン人の存在は、早くから研究者の関心を引いてきた。その理由の一つは、アンカラ民族学博物館 (Ankara Etnografya Müzesi) に所蔵される、アラビア文字テュルク語で記された一文書 (EM 13135) の存在である。当文書は、瓜州移住の経緯をトルファン人自身の視点から伝える希有な史料であり、また東テュルク語のハミ (クムル)・トルファン方言の特徴を反映したものとして言語学的にも注目されている [Temir1951; Temir 1961; Yakup 2007; Nuri 2014]。もう一つは、のちに清代新疆における最有力の眷族となるトルファン郡王家が、エミン・ホージャを始祖としており、瓜州移住は郡王家の成立過程という枠組みで把握される事件だからである [佐口 1986: 153-170; 蘇・黄 1993; Kim 2012]。ただし、これまでの研究は、トルファン人の瓜州への移住、あるいはエミン・ホージャの清朝帰順を扱うものが大半であり、移住後のトルファン人の生活や受入側の清朝政権の対応は、なお十分に検討されていない。今後は、EM 13135の解釈の精度向上をめざしながら、不明な点が多く残る瓜州トルファン人社会の具体像、および彼らの移住の歴史的意義に関心を向けていく必要があるだろう。

トルファン人の瓜州移住は、清の中央ユーラシア征服という文脈においても注目に値する。中央ユーラシア方面への支配拡大が、清の国家構造のみならず、その後のユーラシア東部の歴史展開に大きな影響を及ぼしたことは、ここであらためて強調するまでもないだろう。ただし、この一大事業の達成のためには、中央ユーラシアの厳しい自然環境を乗り越え、資源 (ヒトとモノ) 動員にともなう制約を克服していかなければならなかった。この点に関連して Peter Perdue は、清が軍事行動と並行して実施していた経済政策の意義を強調し、その地道な取り組みこそが征服を可能とする原動力を生み出していったと主張する [Perdue 2005: 358-397]。むろん征服達成の要因は清の経済政策のみに収斂されえるものではないだろうが、

ジューンガル戦遂行のための銀両・物資の大量調達、清朝中枢と結びつく山西商人の運搬業務への動員〔香坂 2004〕や、征服達成直後に甘粛で発生した錢価高騰を、中央・地方の当局者が機動的に対処して銅銭を供給し、速やかに収束させた事実〔上田 2009: 284〕は、パデューの議論の妥当性を例証していよう¹⁾。

この観点に立った場合、清がジューンガルと対峙する局面で、当時の清朝領域の西端に位置し、かつ極度の乾燥地域である瓜州に成立をみたトルファン人社会は格好の考察対象となる。後述するように、乾燥地域に属する河西回廊では当時、清による大規模な開発プロジェクトが進展していた。トルファン人をその中に投入された人的資源と捉えなおせば、彼らに対する清朝政権の施策の分析により、領域拡大の最前線における“地道な取り組み”の一端をあぶり出せるはずである。しかも幸いなことに、トルファン人という異質性のためか、その分析を可能とする関連史料が、北京や台北に所蔵される清朝公文書中に比較的豊富に残されている。

以下本稿では、瓜州トルファン人社会の実態を解明しつつ、その存在を拡大する清朝国家の最前線の一コマとして把握しなおし、清の西北戦略の具体像を描き出していく。また、瓜州トルファン人を統率したエミン・ホージャは、ジューンガル滅亡後にトルファンへ帰還して郡王家の礎^{いしづえ}を築き、その一族は清の新疆ムスリム統治を担う重要なポストを歴任することになるが〔新免 2009; 河野 2013〕、瓜州移住にともなう経験や記憶は郡王家の立ち位置や自己認識にどのような作用を及ぼしたのだろうか。この点を探ることは、清の新疆征服の前後を連続面として見通すための一つの視座を提供することにもなるだろう。すなわち本稿は、瓜州トルファン人社会の存在意義を、清の中央ユーラシア征服という文脈と、その局面を生き抜いたムスリム有力者一族の視点とにおいて捉える試みである。

なお、史料引用部分の〔 〕は筆者の補足、()は筆者の註釈、……は中略を意味する。

I EM 13135

まず、本稿で重要な史料の一つとして利用する EM 13135 を取り上げたい²⁾。EM 13135 は 21 行からなり、およそ縦 55.5 cm×横 50.0 cm の大きさをもつ中国紙に記された文書である。アンカラ民族学博物館には、これ以外に 104 葉からなるトルファン郡王家関連の写本 (EM 13138) が所蔵されている。EM 13138 の前半は『欽定外藩蒙古回部王公表伝』(以下『表伝』) 卷 111 に立てられているエミン・ホージャの列伝のテュルク語訳であり、後半には『表伝』に掲載されていない彼の子や孫に関する独自の事蹟が加えられている〔Brophy &

1) やや文脈は異なるが、Bello 2005 は、環境史の視点から清朝周縁の狩猟・遊牧・山地社会と関わりが清の国家建設に与えた影響を論じており、参考になる。

2) EM 13135 の研究史や現状については、紙幅の関係上、必要最低限の情報を提示するにとどめる。より詳しくは、別稿〔小沼 2015a; Onuma 2016〕を参照されたい。

Onuma 2016: 39-58]。EM 13135 と EM 13138 がアンカラに将来された経緯は不明だが、両者の存在は 1951 年に Ahmet Temir が発表した短い紹介文 [Temir 1951] によって知られることになった。その後 Temir は、EM 13135 のファクシミリを付した論考 [Temir 1961] を発表し、明らかな誤解はあるものの、文書の全体像を明らかにした。

EM 13135 は、20-21 行目が途中で人為的に切り取られ、不完全な形で終了する。このため Temir は、本来 EM 13135 はもっと長い内容をもち、EM 13138 につながるものだったのではないかと推測している [Temir 1961: 193]。しかし実際は、両者に関連性はみとめられるものの、筆致からして直接つながるものではなく、EM 13138 の一部分であったわけではない。

では以下に EM 13135 のローマ字転写テキストと訳文を提示する³⁾。全体の内容をあらかじめ整理すれば、①ジュンガルのトルファン侵攻、②エミン・ホージャ率いる約 1 万名のトルファン人の瓜州移住、③瓜州における状況と清の援助、という三部分からなる。これにしたがい、訳文では三つに段落を分けている。また訳文中の【 】内の数字はテキストに対応する行数を示す。

テキスト凡例

Abc 破損・欠落した文字を復元したもの

[Abc] 筆者による補足

///// 破損部分

Abc 裏打ちされた紙に書かれた文字

ローマ字転写テキスト

1. Haqq ta'ālāga hamd aytqandin keyin payğambar «şalla Allāhu 'alaihi wā sallama» ġa durūd ibārgāndin *keyin*, Tūrfān hāqiniñ qışsasi ki, awwal-i zamānda⁴⁾ yüz miñğa yaqin balki mundin ziyādārak kişi
2. edilār. Künlärniñ hawā*disi* zamānaniñ wāqi'alariniñ sababi bilān Junğar laşkariniñ şarr-şüridin hamasi tāriḥqa bir miñ bir yüz ottuz beşinci aṭ yilida Čalişğa köçtilār.
3. Wā ol yerdä qaḥṭlikiñ balāsi wā qişniñ sawuqi āfatlarniñ nau'lari bilān halāk boldilar, ġüyä ki qiyāmat qāyim boldi. Bu ruswāliqlarniñ jihatidin ġurūh ġurūh
4. ba'zalar jamā'at bilān wā ba'zalar yalğuz yalğuz qačip kelip yana Tūrfānda nečänd miñ kişi jam' boldilar. Wā yana Junğar kāfirlari bilip tola laşkarlar jam' bolup keldilār. Tā on ikki

3) 文書のファクシミリ、Onuma 2015 を参照。なお転写においては、先行する母音の後舌音/前舌音に応じて i / i と書き分けることはせず、i に統一する。

4) awwal にエザーフェが入ることを示す記号 (kasre) が付されているため、awwal-i zamānda と転写したが、本来であれば awwal を形容詞とみて awwal zamānda (当初において) でよいと思われる。

yil

5. soqušmaq wä öltürüşmāk bilān qattıg janlar qilduq. Andin keyin kāfırlarınıñ ğalabasınıñ tolalıgıdin ba'zaları öltürdilār wä ba'zaları tutup asır qildılar. Oğul atadin,
6. qız anadin judā boldılar. Nā-čār bī-čāra bolup ol waqtınıñ sulṭāni zamānanıñ pādšāhi ki, ḥazrat-i 'izzat āsmānınıñ āftābi wä sa'adat aujınıñ māhtābi wä 'azamat maydānınıñ
7. köčāti wä rif'atınıñ baland yulduzi Şüfi Hōjam (sic.) bilā ma'rūf ḥazrat-i M[i]r Ḥabīb Allāh Walī Allāhınıñ farzandları, ḥazrat-i Niyāz H^wāja Āḥūnd, bularınıñ farzandları ḥazrat-i Amīr al-Mū'minīn Amīn
8. Hōja Beg ki, biziniñ sulṭānimiz sardārimiz dur ki, maşlahatkā qoşulğuçi umarā wuzarā, wājib al-ihtirām 'ulamā qāzılarnıñ, balki jamī' ḥāşş-'āmm qaumlarınıñ ittifaqi bilān amn wä amānliqni
9. ḥ^wāhlap, Ćin pādšāhidin panāh ṭalab qildılar. Şāh-i Ćin ijābat qilip qabūl qildılar. Wä ḥazrat-i Amīr al-Mu'minīn biz bī-čaraniñ başiğa sāyabān bolup yettā başlıq azhdarlar
10. niñ wä panja-zan yolbaslarınıñ ağızıdin qutqarip ḥalāşlıq barip hama ta'alluqātlar birlā pādšāh-i Ćinniñ izn bilā hama yemāk, içmāk, kiymāk, wä yol jabduqları birlā
11. ulağlarğa, aṭ, tiwā, arabalarğa olturğuzup toqquz miñ üç yüz yetmiş tōrt kişini ta'riḥqa bir miñ bir yüz qırq altınci yilan yilida Ṭurfān diyāridin keçürüp
12. şihhat salāmat şubu Waju diyāriğa yetkürdilār. Keyinki yili ki ta'riḥqa bir miñ bir yüz qırq yettā aṭ yili har birimizğa 'alā-ḥida şahrlar, öylār, wä zamīnlar, aqin su ariqları bilān
13. berip olturğuzdılar. Şahrlarnıñ aṭı : Tufu, Erfu, Sānfu, Sifu, Ufu, Taş, Şōgān. Wä yana bu şahrlarnıñ zamīnini Wajuniñ hamrāhliqi bilā ariqlar[i] bilān Taş
14. Şōgānnıñ zamīnini ham ariqları bilān bizniñ tarimaqimiz wä olturmaqimiz wä zirā'atimiz üçün berdilār. Bu şahrlarnıñ zamīnlār [i] niñ tōrt ḥadd [i]: maşriq ṭarafı Kördüm-ki Kūtaş⁵⁾
15. Şaṅtar, mağrib ṭarafı Biçifu, şimāl ṭarafı Sulaḥu, janūb ṭarafı Kördüm-ki Kūtaş. Bu zamīnlarınıñ aqin sularınıñ bulaqlarınıñ başi : Dājüy, Buluḡur, Damğa, Kōtān,
16. wä Čaṅmar, wä Sirab, Taş, Şibućin. Wä yana tōrt zamīn ki: otluğ Jalunḡunḡin tā Lusugu,

5) Temir 1961 掲載のファクシミリでは、EM 13135 の 14 行目末尾にも、部分的に切り取られた箇所があり、切り取り部分の上部にわずかに残る文字の線形から、Temir は 15 行目にも現れる“Kördüm-ki Kūtaş” (Kördüm-ki Kūtaş) が記されていたと推測している。この推測はおそらく正しいが、それは文書作成者（あるいはコピーリスト）が、「南辺」であるはずの Kördüm-ki Kūtaş を、「西辺」として誤って書き込んでしまったからであり、誤りに気づいたため、この部分は切り取られたと考えられる。ところが、2014 年に筆者が EM 13135 を実見した際には、ここに小さな紙が裏打ちされ、その上に青色のインクペンで“Kördüm-ki Kūtaş”と書き込まれていた。1961 年以降になされたであろうこの「補正」は文書作成者の意図を汲んでいない。よって本稿の訳文においては、この「補正」を無視している。

- Darağša, wā Doḡbalu, wā Šibučingičä. Bularni otlarini ormaq, aṭ, kala, qoy, tiwä
17. larni yaylatmaq otlatmaq üçün berdilär. Wä yana Šäh-i Čindin ‘alüfalar, aṭlar, tiwälär, wä čahär-päylarniñ jinsidin, wä yemäk, kiymäk jinsidin, taridurğan uruğlar har qaysidin bizniñ
18. auqätimiz ma‘išatimiz üçün ḥadd-ḥisābdin ziyādäräk berdilär. Andin keyin ḥazrat-i İšān altinči yili ta‘riḥqa bir miñ bir yüz ellik ikki toñuz yilida ḥabā ambanliqğa barip edi. Šäh-i Čin tola
19. iltifätlar qilip, bir šir şuratliğ jasāqliq tamğu dastasi, kümüşdin ağırlıqı yettä fatmān, yana guñluqniñ martabasi bilän şaṅlap⁶⁾ yanip keldilär. Ta‘riḥqa bir miñ
20. bir yüz ellik üç sačqan yilida //////////////
21. daulatidin jā ba-jā tapti. //////////////

訳文

【1】至高なる神に感謝を述べた後、預言者——神が彼に祝福と安らぎを授けますように！——に賛美をおくった後、トルファンの民の話は以下の如し。元々は10万近く、あるいはもっと多くの者が【2】いた。暮らしの災難、時代の不幸により、ジュンガル軍の騒動により、みな1135年午年⁷⁾にチャリシュ⁸⁾に移動した。【3】そしてその地で飢餓の災難と冬の寒さ、苦しみの数々によって、〔その者たちは〕死滅した。まるで終末を迎えたかのようにだった。この屈辱のため群れをなして、【4】ある者は家族とともに、ある者は一人一人で逃げて来て、再びトルファンに数千人が集まった。またジュンガルの異教徒が知り、多くの兵を集めてやって来た。〔雍正〕12年⁹⁾まで、【5】交戦と殺し合いをもって、激しく戦った。その後、異教徒は圧倒的な勝利により、一部の者を殺し、一部の者を捕らえ捕虜とした。息子は父から、【6】娘は母から離ればなれになった。

無力で哀れになり、当代のスルターン、時のパードシャー、尊敬の天空の日光、幸運の天頂の月光、荘厳なる大地の【7】若芽、高みに上りし星、スーフィー・ホージャムとして知られた聖者ミール・ハビブ・アッラー¹⁰⁾の息子であるニヤーズ・ホージャ・アーホー

6) šaṅla- は漢語の「賞 shang」から造成された動詞で、「(目上の者が目下の者に) 賞与する、賜う」を意味する。

7) 西暦1722年10月12日～1723年9月30日；清暦康熙61年8月22日～雍正元年9月2日。

8) カラシャフル (Qara-shahr) の古名。

9) 西暦1734年2月4日～1735年1月23日。

10) 「聖者」を意味する尊称 “Wali Allāh” (*waliyyu’llāh*, 「神の友」) をもつエミン・ホージャの祖父「スーフィー・ホージャム」が、16世紀の著名な聖者ムハンマド・シャリーフの弟子である「スーフィー・ホージャム」と同一人物である可能性が指摘されている [濱田1991: 97-98]。ヤルカンドに現存するムハンマド・シャリーフの墓廟 (マザール) 内の壁面には、エミン・ホージャの孫であり、当時ヤルカンドのハーキム・ベグであったユーヌスが、1808年に当マザールを修復したことを記念するバルシア語碑文が存在し、そこでも同様の系譜が強調されている [Brophy and Thum 2015]。ただし Brophy と Thum が述べるように、たとえ両者が同一人物だと

ンド猊下、その息子であり、我らのスルターンにして指導者である信徒の長、アミン・【8】ホージャ・ベグ猊下は、談議に参加せるアミールとワズィールたち、尊敬すべきウラマーとカーズィーたち、かつあらゆる貴賤の集団と一致団結し、安全と平和を【9】求めて、チーンのパードシャー¹¹⁾より保護を請うた。チーンのシャーは応え受諾した。そして信徒の長たる猊下は、我々哀れなる者の頭の日よけとなり、七つの頭をもつ龍【10】と五つの爪をもつ虎の口から救いだし、解放し、家財とともに、チーンのパードシャーの許しをもって、すべての食物・飲料・衣服、そして旅の用意とともに【11】馱獸〔すなわち〕馬・駱駝、および車に載せ、9,374人を1146年巳年¹²⁾にトルファン地方より出発させ、【12】無事にまさしくかの瓜州地方に達せしめた。

その翌年、1147年午年¹³⁾は、我々各人に町、家、土地、流水や水路とともに【13】与え定住させた。町の名は頭堡、二堡、三堡、四堡、五堡、踏実、小湾。そしてこの町々の土地を、瓜州の附属地と諸水路とともに、踏実と【14】小湾の土地もその水路とともに、我々の播種、定住、耕作のために与えた。この町の土地の四方の縁辺は、東方は【15】双塔、西方は百斉堡¹⁴⁾、北方は疏勒河、南方はKördüm-ki Kütash¹⁵⁾。この土地の流水の各源泉は、大泉¹⁶⁾、ブルンギール（布隆吉爾）、党河、Kötän、【16】昌馬〔河〕、Sirap、踏実、そして石堡鎮。さらに〔以下の〕四つの土地、牧草地の八楞墩¹⁷⁾から、蘆草溝、ダラグシャー¹⁸⁾と東巴兎、そして石堡鎮まで。これらを、その牧草を刈り、馬・牛・羊・駱駝【17】を放牧し、牧草を食ませるため与えた。またチーンのシャーは、まぐさ・馬・駱駝、〔その他の〕家畜の類い、食物・衣服の類い、あらゆる播種用の種を、我々の【18】日々の暮らしのために、

1) しても、18-19世紀にまでトルファン郡王家を指導者としてスーフィー教団が存続していたわけではないだろう。また、イリ盆地にあるトゥグルク・ティムール・ハン (r. 1347/48-62/63) のマザールの歴代シャイフについて、その系譜を説明する一写本 (20世紀初頭成立) においても、同様のかたちでトルファン郡王家一族への接続がみられる [玉努斯江 2015]。今後慎重に検証すべき問題であるが、清朝征服後に台頭したムスリム王公らによる、地域社会に対する権威の正統性確保の側面は否定できない。

11) すぐあとに続く「チーンのシャー」とともに清朝皇帝を指す。

12) 西暦 1733 年 6 月 14 日～1734 年 6 月 2 日；清暦雍正 11 年 5 月 3 日～雍正 12 年 5 月 1 日。

13) 西暦 1734 年 6 月 3 日～1735 年 5 月 23 日；清暦雍正 12 年 5 月 2 日～雍正 13 年閏 4 月 2 日。

14) Yakup [2007: 67] の“seven walled-village on the north” (<北七堡) という解釈は不正確で、1734 年 (雍正 12) に建設の「百斉堡」に比定すべきである。「百斉」(「百旗」「伯七」とも) の語源は、おそらく「川の合流点」を意味するモンゴル語 belcír であろう。

15) 場所を特定できない。「私はそれを Kütash とみていた」とも解釈できようが [Yakup 2007: 69]、やはり Kördüm も Kütash も地名とみて、「Kördüm、すなわち Kütash」と理解すべきではないだろうか。

16) 原文では Däjüy。図にもみえ、この地域の重要な水源とみなされる「大泉」(Ch. Da-quan) に比定されると考える。

17) 原文では Jalunđun。正確な位置は不明だが、安西鎮城から南に 70 里の位置にあった「八楞墩」(Ch. Ba-leng-dung) に比定する [肅志: 875]。

18) 原文では Daragša。図にみえる「巴爾木夏」(Ch. Ba-er-mu-xia) に比定する。

際限なく与えた。その後、イーシャーン猊下(エミン・ホージャ)は、〔乾隆〕6年¹⁹⁾、1152年亥年²⁰⁾に参贊大臣のもとに行った²¹⁾。チーンのシャーは、多くの【19】恩恵をほどこし、虎の姿をした柄のジャサク印、銀塊7バトマン²²⁾、そして公の地位を賞与し²³⁾、〔エミン・ホージャは〕帰って来た。1153年²⁴⁾〔子年に²⁵⁾〕/////【21】〔の〕国から移動した(?)。/////

II 瓜州への移住

1 18世紀前半の河西回廊

1717年(康熙56)、清が天山東部に軍を進めると、ジュンガルとの間に、トルファンのムスリム住民を巻き込んでの断続的な衝突が生じた。ここでジュンガルは、1722年頃にトルファン人の大規模な徙民を実施し、2万人²⁶⁾ものトルファン人が、まず「チャリシュに移動」〔EM 13135:l. 2〕させられ、そこからさらに西のアクスやウシ(ウチ)に移住させられた。1725年(雍正3)に和議が成立し、清軍はいったん天山東部より撤退した。この時にトルファン人650名が肅州の金塔寺と威魯堡に避難のため移住した〔佐口1986:148-150〕。

ジュンガルによって西方に移住させられたトルファン人の一部は、過酷な環境に耐えきれず、トルファンに逃げ帰る人々もいた〔ll. 3-4〕。この中に、実はエミン・ホージャも含まれていたらしい〔小沼2015b:4; Brophy & Onuma 2016:2〕。しかし、エミン・ホージャ自身がそれを直接語った史料は現段階で見出せず、EM 13135もその事実を記していない。エミン・ホージャにとって、おそらく触れたくない過去の苦い経験であったのだろう。

ジュンガルと清の間の平和は長続きせず、1730年(雍正8)に両軍は再び天山東部で衝

19) 西暦1741年2月16日~1742年2月4日。

20) 西暦1739年4月10日~1740年3月28日。これは清暦で乾隆4年3月3日~乾隆5年3月1日の期間になるので、乾隆6年と時期が一致しない。

21) テキスト中の *hābā amban* は、満洲語の *hebe i amban* (参贊大臣) の音写。新疆征服前、参贊大臣は常設の役職でなく、遠征時に編成される軍団を統率する将軍を輔佐する階級職(参謀、副司令官に相当)であった。何らかの誤解があるのかもしれないが、次に続く文脈から判断して、ここでの *hābā ambanliq* (参贊大臣のもと) は清朝宮廷を指し、エミン・ホージャの入観を意味すると考える。

22) Yakup [2007: 69] はジャサク印の把手の重さと判断しているが、入観者に対して皇帝から賜与される銀塊を指すのであろう。バトマン *batman* (<*fatmān*) は中央アジアで伝統的な重量単位であったが、18-19世紀の新疆では、①1 *batman*=1斤(=596.82g)、②1 *batman*=8 *ghalbir*(=約580kg)、③1 *batman*=57.3kg. という三系統があった〔堀1978:64-65〕。ここでの「7バトマン」は、おそらく①のケースであろう。

23) 清朝史料によれば、エミン・ホージャに対する公爵授与は、雍正10年11月12日〔1732/12/28〕となっている〔Onuma 2012:32〕。誤解か。

24) 西暦1740年3月29~1741年3月18日。

25) 原文では *sač-*までしか確認できないが、「子年に」(*sačqan yilida*)と復元できる。

26) この数字はウシへ移住したトルファン人の証言によるものである〔澁谷2008:25〕。

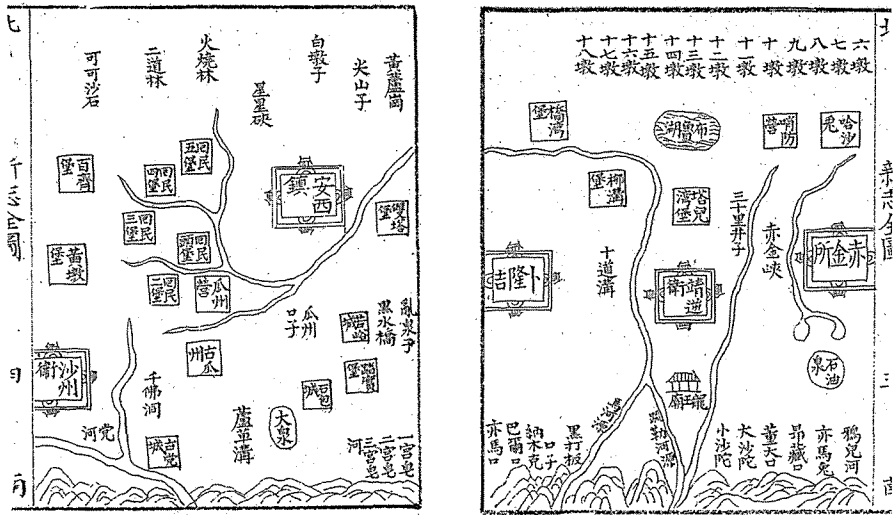


図 1737 年前後の瓜州周辺 [肅志：20-21]

突した。この局面で、トルファン盆地東部のルクチュン城に拠るエミン・ホージャは清軍と同盟し、ジュンガル軍の撃退に貢献した。1732年（雍正10）秋に再び和議がなると、清軍の撤退にともなって、エミン・ホージャに率いられた約1万人のトルファン人が移住を開始し、ハミに近いタルナチンで冬を越した後、1733年（雍正11）に甘粛西部の瓜州に到着した。移住後にエミン・ホージャは、1697年に清へ帰順していたハミのウバイドゥッラー・Ubaydullā（ハミ郡王家の祖）の例に倣ってジャサクに任命され、かつ輔国公に授封された。なお、清軍の撤退をともなった彼らの瓜州移住後、トルファンは間接的ながらジュンガルの支配下に帰した [小沼 2015b: 5-7]。

このトルファン人の移住は、当時の清の西北戦略の中でどのように位置づけられるのだろうか。1717年以降ジュンガルとの対立が深まると、清朝政権は甘粛、特に「口外」と呼ばれ、人口密度の低かった嘉峪関以西の地に対する本格的な「殖民実辺」策を展開し始めた²⁷⁾。1718年（康熙57）に口外地域に靖逆衛（現三道溝鎮）を、1723年（雍正元）にはさらに西のブルンギールに安西衛を設置する。1725年に沙州（敦煌）、1727年には柳溝にも衛を設置し、1728年には安西・沙州・柳溝の三衛を統轄する安西庁を設置し、鎮城を大湾の地に建設した（図の「安西鎮」）。また、この三衛の新設にともない、1732年までに地区全体で約1,245頃（約7,660ha）を開墾し [肅志：883]、入植者²⁸⁾が募られた（招民）。例えば、1726年に沙州への移民2,500戸を陝西から募り、翌年には目標の7割を達成した [雍宮 17:

27) 18世紀前半の甘粛における開墾の概要については、趙 2005: 111-118を参照。

28) 陝甘地方からの入植者には、漢人だけでなく回民（現回族）も含まれていたと考える。

520-521]。1730年にジューンガルと戦争が再燃すると、陝甘総督劉於義（在任期間：1732-35）のイニシアティブのもとで開墾の動きは加速した。劉は着任当初から西部戦線の兵糧確保のため甘肅の「屯墾」の重要性を強く訴えていた²⁹⁾。1733年には、甘肅中部の高臺で黒河から三清渠を開削し、招民と開墾を推進した [井黒 2009 ; Iguro 2013]。

このような状況のもと、1732年から33年にかけて、西からトルファン人は瓜州に移住してきたのである。従来の研究では、ジューンガルからの圧迫からの避難という側面が強調されており、確かにEM 13135においても、エミン・ホージャが清朝皇帝に対して保護を求めたとのみ記されている [I. 8-9]。ところが実際には、1731年の段階で清朝政権は、具体的な移住先は未定ながら、事前にエミン・ホージャに領内移住を打診しているのである [雍宮 18: 134-136]。要するに、トルファン人の瓜州移住とは、甘肅西部の重点化を急ぐ清朝政権の思惑と、トルファン人側の思惑の合致の上に生じた現象だったのである。

2 瓜州への入植

トルファン人の移住先に関して、すでに佐口 [1986: 155] が指摘するように、当初は清の將軍チャランガ Calangga (査郎阿) より、嘉峪関内の肅州の東北にある王子荘への移住が提案されていた。しかし清朝中央は、王子荘における水泉と可墾地の不足を理由に却下し、瓜州への変更を命じた。決定の勅諭では、その理由について、瓜州に備わる肥沃な土壌、潤沢な水泉、穏やかな気候、トルファンとの景観の相似性、そして可墾地の豊富さを列記している³⁰⁾。ただし、ここで説明される土壌・気候条件は瓜州の条件と必ずしも一致しない。むしろ、可墾地が豊富という点に主眼が置かれていたのではないだろうか。トルファン人の移住時、嘉峪関外の安西地区では、行政・軍事の中心として安西庁は設置されたものの、なお「殖民実辺」は未達成の段階であった。瓜州の選定は、極めて戦略的観点からなされたと考える。

トルファン人の移住に際して、清朝政権は様々な支援をおこなった。まず瓜州までの移動のために、皮衣・口糧・清油・羊・茶・塩・紬緞・梭布・銀両を支給し、車両も準備した [雍宮 22: 198-199 ; 新満 2: 136-138]。しかしそれでも、約1年の時間を要した移動には、多くの困難がともなったようである。EM 13135 が伝える 9,374 人 [I. 11] という数字は、1732年末にトルファンを出発した時の人数と考えられる。しかしその後、逃避行の困難さからか、1733年1月のタルナチン到着時に 9,273 人 [新満 2: 137]、1733年9月の安西鎮城到着時に 8,013 人³¹⁾、そして1733年10月の瓜州入植時には 7,873 人まで減少した³²⁾。

瓜州における住居建設も急ピッチで進められ、わずか5ヶ月（1733年5月17日～10月26日）で、「回民五堡」と総称される頭堡、二堡、三堡、四堡、五堡 [I. 13] の城塞と合計

29) 軍宗 03-0002-030, 雍正 11 年 11 月 24 日 [1733/12/29], 署理陝甘總督劉於義の奏摺。

30) 世実 126: 12b-13b, 雍正 10 年 12 月庚午 [1733/2/1] 条。

31) 世実 134: 10, 雍正 11 年 8 月戊辰 [1733/9/27] 条。

32) 宮宗 04-01-01-0015-007, 乾隆 2 年閏 9 月 24 日 [1737/11/16], 甘肅巡撫德沛の奏摺。

表 回民五堡の構成 [肅志：911-913]

| 城堡 | 出身地 | 戸数／人数 |
|----|------------------------------------|---------------|
| 頭堡 | ルクチュン, 泗爾堡 (?) | 1,017 / 4,064 |
| 二堡 | カラホージャ, ムルトウク | 348 / 1,254 |
| 三堡 | スバシ, レムジン, 小アスタナ, ピチャン, 述桂 (センギム?) | 307 / 1,244 |
| 四堡 | 塞木 (?), 津海 (?), 土之城 (トクスン?) | 327 / 1,251 |
| 五堡 | トルファン, アスタナ, ヤルホト, ハンドウン | 338 / 1,351 |
| | 合 計 | 2,337 / 9,164 |

4,290 部屋³³⁾の建造し, その5日後の10月31日にはトルファン人の入居が始まった [雍宮 22: 200-201]。住民への住居分配に際しては, 以下のように出身地ごとに割り当てがなされた。

各堡の人口比からもわかるように, エミン・ホージャが居住した頭堡の規模は, ほかと比べて大きく, 東西 529.8 m, 南北 534 m, 282,913.2 m²の大きさをもっていた [国家文物局 2011: 305]。頭堡の城壁は, 瓜州郷の頭工堡地区に現存している [Onuma 2015: 24]。ただし, 清の工事責任者が自ら認めているように, 移住後ただちに農地開墾を進めねばならないという必要性に迫られた突貫工事であった。しかもこれら家屋は, 塩分を多く含む土壌をレンガの材料としていたため非常に脆かった。特に三堡の状況は深刻で, 入居開始から1ヶ月で家屋の半数に歪みや傾きが生じ, 倒壊による死者も出るあり様だった [新満 3: 44-47]。

EM 13135 には, 住居のほかにも, 清朝皇帝がトルファン人の生活支援のため, 耕地・水路・家畜・食糧・衣服など様々なものを提供したとある [II. 12-18]。実際に清側は, トルファン人に農地, 家畜 (牛・馬・騾), 農具, 車輛を無償で提供している。また穀物種子, 食糧, 運搬費用は貸与し, 彼らの農業生産が軌道に乗った後に順次返済させることにした³⁴⁾。

また入居完了後の1735年 (雍正 13), 清朝はトルファン人の管理を目的として, 五堡の近くに瓜州城³⁵⁾を建設し, 参将の指揮下に兵 600 名を駐留させ, また安西鎮城にいた安西同知を瓜州城に移して民政を担当させた [肅志: 917-918]。

III 水利灌漑と農地開墾

1 入植地の整備

甘肅西部の平原部は, ほとんどが年間降水量 50 m 未満の極度の乾燥地域である。水資源確保の重要性は, トルファン人の水源情報に対する高い関心 [II. 15-16] から明らかであ

33) 1737 年頃の記録では部屋数の合計を 4,866 部屋とする [肅志: 914]。これは増築分も含んでいるのであろう。

34) 宮宗 04-01-01-0003-035, 乾隆元年 4 月 22 日 [1736/7/1], 署理川陝総督劉於義の奏摺。

35) 瓜州郷の中心部である瓜州堡村の東 500 m に位置し, 「巴州古城」の名で甘肅省文物保護單位に登録され, 城壁の一部が現存している [国家文物局 2011: 305; Onuma 2016: 26]。

ろう。オアシス出身の彼らが瓜州で生計を立てていくためには、灌漑インフラの整備を前提とした農地開墾が必須であった。

人口希薄であった口外地域に対する開発は、まず軍事拠点である衛を設置して、その上で周辺に大規模な灌漑水路を掘削し、同時に農業移民を入植させて農地開墾を進めるというパターンで一貫している。当該地域の開発の端緒は1718年の靖逆衛設置であるが、そこでも衛の設置後、祁連山脈から流れ下る疏勒河から取水して靖逆東渠・西渠が掘削された。その西の安西地区では、前述の如く、1728年に中核となる安西庁(安西・沙州・柳溝の三衛を統轄)が設置された。始動はやや遅れたが、1732年に劉於義が陝甘総督に着任すると、同年新設の安西兵備道に任命された王全臣を指揮し、また管孫翼³⁶⁾など「水利営田」に経験豊富な人材を登用して、開発を推し進めていった。早速王全臣は3,500石(1石=103ℓ)の農地³⁷⁾を瓜州に開き、それを1733年10月に入植したトルファン人に提供した[肅志:905]。回民五堡は、この「新たに開いた屯地の内に建設」[肅志:917-918]されたものだった。

清朝政権は、1732年から口外地域で新たに二つの大規模な水渠の建設を開始し、1733年のトルファン人到来までに完成させた。一つは、靖逆西渠から疏勒河へ88里(約50km)の渠道で、堤長10丈(約32m)の攔水壩(ダム)、三つの減水閘(水門)を付設していた。これは靖逆西渠の余水を疏勒河に戻して本流の増水を目的としていたが³⁸⁾、同時に排水路の役割も果たしたと考えられる。もう一つは、安家窩舖³⁹⁾から瓜州へ101里(約58km)の渠道で、堤長20丈(約64m)の攔水壩、三つの減水閘を付設しており、瓜州の灌漑を目的としたものであった⁴⁰⁾。こちらは、『重修肅州新志』で「回民北渠」と呼ばれる、疏勒河から回民五堡に直達する水渠を指す考えられ、それは回民五堡の地で比櫛渠(四堡・五堡)、崇壩渠(頭堡)、千倉渠(二堡)、満箱渠(三堡)の四つの支渠に分かれた[肅志:907-908]。

また清朝当局は、両水渠の維持・管理の責任者として水利把総を設置し、その統轄のもと、前者に看守閘壩人4名と巡渠夫10名を、後者に看守閘壩人10名と巡渠封俵⁴¹⁾夫40名を置

36) 劉於義の亡妻の堂弟(父方の従弟)で、直隸地方で「水利営田」の業務に従事した経験をもっていた。軍宗 03-0028-007, 雍正 11 年 11 月 24 日 [1733/12/29], 署理陝甘総督劉於義の奏摺。

37) この「3,500石の農地」とは、3,500石の播種が可能な土地を意味する。

38) 1738年(乾隆3)にも、疏勒河の水量増加のため、靖逆衛北の蘑菇灘の南側にある川北湖と鞏昌湖から西流する余水に着目し、新渠を開削して橋湾の東南で疏勒河へ導き入れている(宮宗 04-01-05-0003-021, 乾隆 3 年 7 月 2 日 [1738/10/16], 川陝総督查郎阿の奏摺)。農地拡大とともに、限られた水資源をいかに有効活用するかが課題となったようである。

39) 大湾と小湾の間にあったようだが、正確な位置は特定できていない。

40) 軍宗 03-0031-009, 雍正 11 年 10 月 24 日 [1733/11/30], 署理陝甘総督劉於義の奏摺。

41) 「封俵」の語義については、未だ確定できていない。史料中に「用水之時、須均匀封俵、庶上流之水不致散漫、下流之水不致不足」[軍宗 03-0031-009]という説明があり、「庶」を「遮」とみれば、「水を用いる時、きちんと封俵を整えて、上流の水をとどめてして無駄に垂れ流さなければ、下流の水は不足しない」と解釈できる。おそらく、土糞などを積み上げて流水量を調整する作業を指すと考えられる。

いて、水量・水流の調整、攔水壩と減水閘の修理⁴²⁾、秋季における浚渫等を専ら司らせた。そして彼らの食糧と修理費用のために、官費によって靖逆・安西で新たに農地を開いて漢人民戸に提供し、その収穫を充当することにした⁴³⁾。その後、経費増大と収穫不良によって損失が膨らんだため、早くも1736年には、上記制度を撤廃し、民戸50家族を免税で入植させ、彼らに巡渠看壩の任務を委託する見直し案が提出された⁴⁴⁾。ただし、この変更は実行されなかったようで、後年の記録によれば、清朝当局は水利把総1員と渠兵80名の維持のため毎年銀3,000両を費やしていた⁴⁵⁾。

2 新たな農地の開墾と生活の実態

トルファン人到着時に清が開墾して準備したのは、回民五堡に付随する3,500石の農地であった。翌1734年、王全臣はトルファン人を動員して、さらに1,500石の農地を開かせた。これら合計5,000石の土地は、小麦4,500石と青稞（ハダカムギ）500石を播種する穀物栽培用の農地である。これとは別に、トルファン人は野菜・果物などの非穀物農地として2,000畝（約12.3ha）を開いた〔肅志：905〕。

ところが、以上の回民五堡の付随地だけでは移住者全体の食糧をまかなえず、4,000石の食糧不足が生じた。1735年、エミン・ホージャは回民五堡に近接する踏実堡（870石）、双塔（100-200石）、百芥堡（100-200石）、小湾（1,800石）の合計約3,000石の土地賞給を請願した。これらはEM 13135に現れる地名と見事に一致する。また、その実現のためには、食糧不足分4,000石に翌春播種分8,000石（5,000石+3,000石）を加えた合計12,000石の借入が必要であったが、6年分割返済を条件に清朝当局はすべての要求を認めた。さらに建築資材や薪に用いる木材の不足を解消するため、瓜州一帯に2年間での楊柳3万株の植樹とその費用銀2,100両の支給も決定した⁴⁶⁾。瓜州の南に達する「回民南渠」〔肅志：908-909〕は、以上の農地拡大に対応して掘削されたと推測される。

以上のように、清朝政権の全面的な支援のもと、トルファンからの避難民は瓜州で新たな生活をスタートさせた。トルファン人は蘆草溝、東巴兔、石堡鎮など瓜州南方の牧草地を提供され、そこで馬・牛・羊・駱駝を放牧していたが〔Ⅱ. 16-17〕、彼らの経済活動の中心はやはり農業であった。しかし、気候や土壌の条件が悪い甘粛で栽培される農作物は限られていた。18世紀前半の清朝史料は次のように報告している。

〔甘粛では〕小麦・莞豆・粟米を上等となし、青稞・大豆を次とし、さらに大麦がこれ

42) この地方では夏に南方の山峰（南山）から鉄砲水が出て、しばしば水路が破損した。

43) 註40, 同史料（軍宗03-0031-009）。

44) 宮宗04-01-01-0009-053, 乾隆元年12月10日〔1737/1/10〕, 署理川陝總督劉於義の奏摺；明清A69-58。

45) 宮宗04-01-23-0040-006, 乾隆24年7月12日〔1759/9/3〕, 陝甘總督楊應琚の奏摺。

46) 宮宗04-01-23-0143-048, 軍機大臣の奏摺。なお、この文書の作成時間は嘉慶6年（1801）として登録されているが、雍正13年（1735）の誤りである。

に次ぐ。土地が痩せ気温が低いので、一年で一種類の作物が熟すだけであり、青稞・大豆・大麦は播きやすく成長しやすいので、これらが比較的多い〔匯編：105〕。

毎年末、瓜州トルファン人による播種・収穫量が作物別に報告されており⁴⁷⁾、それによれば、彼らが生産する農作物は、上掲史料に含まれる小麦・青稞・莞豆（豌豆）が主であった⁴⁸⁾。ただし播種しても、その一部は「塩気で燻蒸され、熱風で吹き飛ばされ」（鹼氣薰蒸⁴⁹⁾、熱風吹掠）、収穫に到らなかった⁵⁰⁾。また莞豆については、『重修肅州新志』を編纂した黄文煒が、1736年（乾隆元）に小湾で400石を試種させるも収穫はわずか777石であり、「口外の土壤は莞豆にまったく不適で、人々の莞豆に対する需要も元々多くない」と報告している⁵¹⁾。

甘肅でも瓜州一帯の自然環境は特に厳しく、常に自然災害と隣り合わせだった。東亜同文書局『支那省別全誌』は、安西（現瓜州市）の気候を次のように表現している。

気候は寒暑共に烈しく、極寒九〇日、酷暑五〇日に互り、且雨量少なく、春冬兩期季は大風迅烈にして砂石を飛揚して数日息まず、為に天昏地暗言語に絶す〔東亜同文会 1943: 318〕。

200年の差があるとはいえ、トルファン人も同様の環境に苦しんだはずである。清朝当局が、毎年「夏災」（日照り）と「秋災」（蝗害か？）の発生状況を報告するよう義務づけていたことは〔匯編：64〕、それを暗示していよう。実際に上述の6年分割返済の穀物借入では、1年目（1736）から返済不能となり、エミン・ホージャは1年間の猶予を求めている。その後も、「ここ数年、瓜州の収穫は少なく、衛官の損失は頗る大きい⁵²⁾」、「去年は旱害が出たところがあるため、収穫は少ない⁵³⁾」といった報告が見受けられ、「毎年春には籽種と食糧が欠乏⁵⁴⁾」するという状況が続き、清朝当局からの借用が恒常化した〔佐口 1981: 158〕。このような状況は、1729年（雍正7）に招民屯墾に着手した沙州でも同様で、清朝当局が入植者

47) 例えば、匯編 34-35；軍檔 000191，乾隆 12 年 2 月 15 日 [1947/3/25]，甘肅巡撫黃廷桂の奏摺；明清 A152-074，乾隆 13 年 4 月 5 日 [1748/5/1]，戸部尚書傅恒の奏摺；乾宮 2: 118-119，乾隆 16 年 12 月 4 日 [1752/1/19]，陝甘總督黃廷桂の奏摺；乾宮 7: 71-72，乾隆 18 年 12 月 4 日 [1752/1/19]，陝甘總督黃廷桂の奏摺；内閣 097953-001，乾隆 20 年 12 月（日付不明），署理陝甘總方觀承の奏摺など。

48) なお、トルファン人は南山から産する堅い沙石を利用し、穀物の脱穀・製粉に必要な挽臼（水旱磨）を製造していた〔肅志：892〕。

49) 「鹼氣」は「鹹氣」とも記される。「鹼氣薰蒸」とは、実際には塩と水の化学反応によって生じるアルカリ熱傷（alkali burn）を指すが、当時の人々は地中を環流している「鹼／鹹」の「氣」の温度が上昇することで起こる火傷と捉えていた〔Iguro 2013: 201〕。

50) 1739 年（乾隆 4）の播種・収穫量報告〔匯編 34-35〕では、小麦・青稞・莞豆の合計播種量 8,000 石のうち、この理由で約 476 石は無駄になった。

51) 宮宗 04-01-22-0003-036，乾隆 2 年正月 8 日 [1737/2/17]，查郎阿の奏摺。

52) 註 44，同史料（宮宗 04-01-01-0009-053）。

53) 宮宗 04-01-23-0019-003，乾隆 16 年 3 月 24 日 [1751/4/19]，甘肅巡撫鄂昌の奏摺。

54) 同上。

へ皮衣購入用として貸与した銀 7,215 両のうち、1745 年（乾隆 10）に至って返済されたのは、わずか銀 560 両だった [匯編: 89]。

瓜州トルファン人の困難な生活状況は、人口の推移からも読み取れる。上述の如く、1733 年 10 月の瓜州到着時は 7,873 名であった。23 年後の 1756 年（乾隆 21）の統計では 8,815 人と報告されており [乾宮 13: 820-821]、この間の人口増加率は約 0.5% に抑えられている。1755 年（乾隆 20）に清がジューンガル政権を打倒し、故郷帰還の許可の一報が入ると、彼らは「ワクワクしながら待ち望み、耕作〔期〕に至っても水路を補修せず、地方官の督促によってはじめて農作業を始めた」[乾宮 13: 820-821] という。清朝史料特有の誇張はあろうが、彼らが厳しい生活を送り、強い望郷の念にかられていたことは確かであろう。

瓜州における 23 年間の生活を通じて、最終的に彼らは 20,450 畝もの土地を開墾した [佐口 1986: 159]。1757 年に故郷トルファンに帰還すると、清朝政権は安西庁所属五衛地方から入植者を募集し、移住した民人 682 戸に 1 戸あたり 30 畝の割合で分配した。さらに瓜州の未種荒地 19,550 畝への招民開墾が奨励された。これにともなって水利把総を撤廃し、渠兵の数も 10 名に縮小された⁵⁵⁾。

IV 瓜州トルファン人社会の諸相

清朝公文書中には、瓜州のトルファン人が起こした様々な事件が伝えられている。以下に興味深い事例をピックアップし、瓜州トルファン人社会の内実を垣間みてみたい。

1 逃亡者に対する処罰

トルファンから瓜州に至るまでの人口減少は、死亡・病気等による落伍者だけでなく、多くの逃亡者が存在したことを物語っている。瓜州到着後、最初に発生した逃亡事件として記録されているのは、1734 年春のものである。清朝官員のライウエン (Ma. Laiwen) がトルファン人男性を率いて牧草刈りに出かけた時、3 人が逃げ出した。西に向かった彼らは途中でハミからやってきた清の輜重隊に捕まり、瓜州に連れ戻された。この事態に劉於義は、官員エルゲ (Ma. Elge) を瓜州に派遣し、トルファン人たちに次のように伝えた。

お前たちを内地に移住させたのは、特にジューンガルの賊がお前たちを殺掠し苦しめぬようにと慮り、万全に保護するためである。元来、移住に際して、「移住を望む者は来い。望まぬ者はこのままトルファンに留まるように」ときちんと言った。その時、お前たちはみな移住を望むと言ったので、いまやっと内地に到着したのである。いったん来

55) 宮宗 04-01-23-0026-002, 乾隆 22 年 9 月 26 日 [1757/11/7], 陝甘總督黃廷桂の奏摺; 宮宗 04-01-23-0040-006, 乾隆 24 年 7 月 12 日 [1759/9/3], 陝甘總督楊應琚の奏摺。金塔寺と威魯堡のトルファン人も同じく帰還するが、彼らが残した開拓地 10,021 畝には、肅州から民人が入植した [佐口 1986: 159]。

ておいて、いままた逃げていくとは、いかなる道理だ。心から内地に住むことを望まぬなら、ただもとの場所にずっといるべきであったろう。……いまになって、もしもお前たちの中に、もとの場所に行きたい、あるいはジュンガルの地に行って住みたいという者がいるなら、それぞれ事情を申し出よ。申し立てが一切なければ、ただちに家畜と食糧を賞与しよう [新満3: 287-288]。

むろんその場で反対意見が出るわけもなく、清朝当局側は移住者たちから残留の意思を「再確認」した。そしてこれを言質として、以後逃亡者が出て、それを捕らえた場合は、「必ず正法 (Ma. ilihai fafun) をもって処罰し、ぜったいに容赦するな」[新満3: 288] という指針を定めた。「正法をもって処罰」とは、生殺与奪の権を握る皇帝にうかがいを立てず、現場の判断で即座に処刑することである。

しかし、その後も逃亡者は後を絶たず、早くも1734年末にルーズィー・ムハンマド Rūzī Muḥammad (羅子買麥啼) が逃亡を企てた。その処罰を論ずる漢文文書でも、上記の指針が「必立即正法、决不輕貸」と翻訳引用されているが、彼はまだ16歳と若く、家主からの暴力を恐れたことが逃亡の理由であったため、清朝当局は酌量して杖刑にとどめた⁵⁶⁾。

2 アブドゥルハーリクの要求 (1733)⁵⁷⁾

瓜州にトルファン人が到来した知らせは、すでに1725年に肅州に移住していたトルファン人にもたちまち伝わった。威魯堡に住むアブドゥルハーリク 'Abd al-Hāliq (阿布哈里克) は、瓜州に離散した両親がやってきたという噂を耳にし、清朝当局に照会を求めた。調査の結果、父親のみが健在で、母親はトルファンですでに病死していた。当局はアブドゥルハーリクに瓜州へ赴き、老齢の父を世話することを認めた。

これは決して重大な案件ではないが、行政処理のプロセスがわかる点が興味深い。アブドゥルハーリクは、威魯堡頭目のニヤーズ・マフムード Niyāz Maḥmūd (呢亞斯麻木特) を通じて肅州鎮総兵官沈力学に照会した。この時、ニヤーズ・マフムードは「番詞一紙」(おそらくテュルク語の書簡) を送呈し、清朝当局側はそれを翻訳して事情を理解した。その後、沈力学は安西兵備道王全を通してジャサク公エミン・ホージャに調査を依頼し、その結果を受けた沈力学は陝甘総督劉於義に報告した。劉於義は清廷に上奏し、最終的に皇帝の裁可をえた。

3 車戸襲撃事件 (1736)

瓜州とその南に位置する大泉(大泉子)の間には荒野が広がっている。1736年初頭、安西から馬連井に向かう山西人の車夫韓伏有と武威で雇い入れた趙廣吉は、その地に夜8時頃

56) 軍檔 001996, 乾隆13年3月2日 [1748/3/30], 川陝総督張廣泗の奏摺。

57) 軍宗 03-0008-009, 雍正11年12月4日 [1733/12/29], 署理川陝総督劉於義の奏摺。

差し掛かった。すると突然、何者かにより銃と刀で襲撃された。二人とも命に別状はなかったもの、騾馬2頭と積荷を強奪された。報告を受けた安西衛は探索部隊を派遣し、沙泉子で犯人のムハンマド・ラティーフ Muḥammad Latif (嗎嗎勒替布) とフセイン Ḥusayn (顔色印) を捕捉した。

ムハンマド・ラティーフとフセインはともに五堡の住民で、前者はヤルホト、後者はハンドゥ出身であった。ムハンマド・ラティーフのよると、ハミ在住の兄オスマン 'Oṣmān (阿找滿) に会うため、狩猟をすると偽り、フセインを誘って無許可で出発した。3日後に沙泉子で車夫に遭遇して、これを襲撃したという。ムハンマド・ラティーフの所持していた銃は2年前に銀3.5両で購入し、鉛弾はトルファンから持ってきたものだった⁵⁸⁾。

4 エミン事件 (1746-47)⁵⁹⁾

1746年秋、頭堡の住民で32歳のエミン Emin (額敏) は、借金返済が不能となったため、ハミ・ルクチュンへの逃亡を計画する。エミンによれば、そこで金を稼いだ後、帰ってきて借金を返済する計画だったという。9月29日、彼は頭堡の東門にあった張世元の店舗で小銃を見つけ、路中狩猟しながら進もうと考えた。そこで一計を案じ、「ジャサク公の羊廠の見張りをしているのだが、そこに狼が出る。銃を売ってくれば、狼を追いはらうことができる」と説明すると、張世元はこれを信頼して売却した。エミンは次に營兵陳永福の家に向かった。彼は留守だったが、母親趙氏から鉛弾40と火薬を購入した。エミンは常日頃、陳永福に柴を売りに来ていたので、母親も疑いを抱かなかったのである。ただちにエミンは、同じく逃亡を考えていた何見美牙爾 (<Hōjamyār?) とともに頭堡を密かに抜け出した。6日後、標杆地方に到着して何見美牙爾が頭堡へ帰ると言い出したため、彼が寝ている隙に馬を奪って一人で前進した。さらに5日後、ニヤーズ Niyāz (呢牙斯) というムスリムに出会い、彼にハミ貝子のもとに連れて行ってもらうべく頼んだが、清朝当局に身柄を引き渡され、安西に送致された。1747年4月20日、エミンは瓜州で公開処刑となった。

何見美牙爾も標杆地方で確保された。追従者は清律で「杖一百流三千里」に処されるところ、トルファン人は「苗疆の辦理の例に照らすべき」であったため、減刑されて首枷60日、板打40となった。佐口 [1986: 159] が指摘するように、1741年には「以後、安西回民の一切の命盜等の案は榆林・寧夏・口外蒙古の例に倣照して辦理⁶⁰⁾」するよう定められていた。それと本案件の処理は一致をみないが、瓜州トルファン人が法制面で特別扱いであったことは指摘できる。

58) 軍宗 03-0002-030, 乾隆元年正月25日 [1736/5/7], 署理川陝總督劉於義の奏摺。

59) 註56, 同史料 (軍檔 001996)。

60) 高実 146: 30a-b, 乾隆6年7月甲戌 [1741/8/22] 条。

5 ナザルマト事件 (1748)⁶¹⁾

頭堡に住むナザルマト Nazarmat (呢雜兒馬特) は、自身の結婚時の借入が返済できなくなり、人から殴られ恥辱を受けた。1748年10月17日、ダルガへの奉仕に必要であると偽って、五堡に住む義兄の薩克生青 (Ch. Sa-ke-sheng-qing) から馬を、知人のニヤーズ・ベグ Niyāz Beg の娘から鞍を騙し取り、ルクチュンへ逃亡した。翌日薩克生青が馬を返してもらおうとダルガ (Mo. darγ-a⁶²⁾) のもとへ赴き、事件が発覚した。ただちにエミン・ホージャの息子スレイマン Sulaymān に報告が行き、そこから安西提督永常、さらに所属各衛へと連絡が伝わり、首尾よくハミへ向かう途中にある高泉地方でナザルマトを捕捉した。処罰に関して、甘肅巡撫瑚宝は、前年のエミンの案件と比較し、ナザルマトが銃器を携帯していなかったことを酌量して正法は厳しすぎると判断した。

以上の事例から、以下のポイントが指摘できよう。(1) 瓜州トルファン人は自由な移動が規制され、特にトルファン・ハミ方面への逃亡は厳禁であった。(2) その禁を犯した場合、厳しく処罰された。その処罰は「榆林・寧夏・口外蒙古の例」「苗疆の辦理の例」を基準としており、民人一般を対象とする清律と異なっていた。(3) トルファン人有力者 (ジャサク、ダルガ) が清朝行政システムの末端に位置づけられ、清朝権力とローカルな社会をつなぐ役割をはたしていた。(4) 銃・鉛・薬が比較的簡単に入手することが可能であった。(5) 漢人の商人・官兵との日常的なつきあいがあった。

おわりに

以上、瓜州におけるトルファン人社会の成立と実態を検討してきた。清とジューンガルとの戦争に巻き込まれ、故郷を離れて瓜州に移住してきたトルファン人は、清朝政権の手厚い支援を受けつつ、新たに土地を開き農業を基盤とする生活を送った。しかし、厳しい気候や痩せた土壌という悪条件もあって、瓜州での生活は決して楽ではなかった。度重なる穀物の借入請求や絶えない逃亡者の存在は、それを如実に物語っている。

一方で本稿では、清朝政権の視点からを照射した場合、トルファン人の移住には、ジューンガルの圧迫からの避難・保護とは別に、ジューンガル戦を見据えた経済政策への人的資源の投入という側面が存在したことを明らかにした。1717年以降、清は天山東部でジューン

61) 宮宗 04-01-26-0002-031, 乾隆 13 年 11 月 25 日 [1749/1/13], 兼辦陝甘總督署理甘肅巡撫瑚宝の奏摺; 軍檔 003851, 年月不明 (乾隆 13 年末?), 瑚宝の奏摺。

62) 「長官」「頭目」を意味するモンゴル語。時代と地域は異なるが、19 世紀末のトルファンの行政文書からは、ダルガが比較的小規模な集落の「一切の事務」を取り仕切り、タイジ (トルファン郡王一族) の管下にあつて、一般住民からの徴税の任などにあたっていたことが窺える [新檔 1: 89; 93; 99]。

ガルと断続的に衝突を繰り返しており、後方に位置する河西回廊、特に人口密度が低かった口外地域の重点化策は喫緊の課題であった。軍事拠点の建設と、その周辺への招民と開墾をパターンとする開発プロジェクトを進める中、約1万人のトルファン避難民たちの受入は清側の西北戦略に合致するものであった。厳しい自然環境の地に誕生した瓜州トルファン人社会は、住居建設、農地開墾、水路掘削・維持、食糧支援など、まさに高いコストをかけた清朝政権の“地道な取り組み”によって維持されていった。そして、18世紀前半を通じて「殖民実効」が大きく進展した河西回廊は、1755-59年の清の西征において輻重を支える主要幹線となり、ジュンガルの打倒とタリム盆地周辺のカシュガリア・オアシス諸都市の征服、すなわち「新疆」の獲得という結果をもたらすのである。

では、このコスト・パフォーマンスの悪さは、上述のような地域開発の喫緊性という視点だけで説明がつくであろうか。瓜州トルファン人に関する豊富な清朝史料の残存状況は、彼らが関心を払うべき異質な集団として清朝政権から認識され続けていたことを示唆する。また、瓜州トルファン人の移動を制限し、トルファンへの帰還を「逃亡」とみて許さない姿勢は、彼らがジュンガルと結びつくことへの警戒心のあらわれに他ならない。万が一、瓜州トルファン人が清からジュンガルへなびけば、異質な彼らの存在を組み込んで構想された甘粛西部の重点化策が見直しを迫られるだけでなく、清の西北情勢が一気に流動化する可能性もあった。瓜州トルファン人に対する手厚い支援の背後には、清の領域拡大の最前線ならではの事情を垣間見ることができる。

清による収益度外視の支援は、後年に到り、別の形で利益が還元されることになる。清は1755-59年の西征にエミン・ホージャは当初から手勢を率いて参加し、後半のカシュガリア戦では清軍の「参贊」（参謀）を務めた。また、この最中にエミン・ホージャは住民を率いて瓜州からトルファン盆地に帰還し、西征における功績も加味されてトルファン郡王家が創始され、郡王家一族はムスリム住民に対する清の統治の実務を担う存在となっていく。

その局面においては、トルファン群王家は自ずと、「異教徒の王」たる清朝皇帝に仕える忠実な臣下として振る舞いつつも、同時にムスリム住民に対してはイスラームの支配者として臨むという、微妙な立場に置かれることになった〔濱田 1993: 128-131; 新免 2005: 216-217〕。そこに生じている一種の矛盾を解消し、一族の権威の正当性をいかに保つかという課題に、彼らは常に直面していたと考えられる。EM 13135は、大仰なるイスラーム的雅称を付したエミン・ホージャを主人公に据え、ジュンガルの暴力的な異教徒として描いているが、その一方で清朝皇帝の異教徒としての側面には沈黙し、「終末」に擬えられたジュンガルの苛烈な攻撃から逃れるトルファン人の保護者⁶³⁾として対置している。まさに上記の矛盾を巧妙に解消（より正確には回避）するためのセオリーによって、EM 13135の

63) ただし EM 13135 では、多難からトルファン人を救済する主体は、あくまでエミン・ホージャとなっている。

文脈は組み立てられているのである。

最後に、EM 13135 が書き残されることになった理由を考えてみたい。従来の研究では、EM 13135 の内容解釈に関心が注がれ、また文書の来歴も不明なためか議論の俎上に載っていないが、筆者はこの問題を解く鍵は EM 13138 にあると考えている。EM 13138 は『表伝』のエミン・ホージャ列伝の翻訳に彼の子や孫に関する事績を付け加え、1800 年から 1805 年の間に成立したものであり、元々はエミン・ホージャの子孫の手元に置かれていたと推測される [Brophy 2013: 251-252; Brophy & Onuma 2016: 40]。ここで注目すべきは、『表伝』のエミン・ホージャ列伝では、瓜州移住についてほとんど紙幅が割かれていないことである。これは EM 13135 が EM 13138 の不備を補うために作成された可能性を示唆しており、であるとすれば、EM 13135 は EM 13138 とほぼ同時期に成立したと考えられよう。この時代、もはや郡王家の歴史、すなわち一族がいかにして現在の地位を獲得するに到ったかについて、それを直接知る世代は少なくなり、特に瓜州時代を知る人物は稀少であったと思われる。推測の域を出ないものの、EM 13135 と EM 13138 はともに、一族のアイデンティティを再確認する作業の中で生み出されたのではないだろうか。しかも EM 13135 は、EM 13138 とは異なり、「我々」(biz) の視点から一族にとって最も苦しかった時代を語っている。エミン・ホージャの子孫たちにとって、EM 13135 は一族の歴史的記憶を呼び覚ます^{かがみ}鑑であったに違いない。後年の新疆ムスリム統治の場における清とトルファン郡王家の相関を理解する上で、瓜州における経験は決定的な転機であり、一族の立ち位置や自己認識の基礎を準備したのである。

参考文献

EM13135, Ankara Etnograye Müzesi.

軍宗：中国第一歴史檔案館所蔵「軍機処全宗」.

宮宗：中国第一歴史檔案館所蔵「宮中全宗」.

軍檔：国立故宫博物院図書文献館所蔵「軍機処檔摺件」.

内閣：中央研究院歴史語言研究所所蔵「内閣大庫檔案」.

肅志：黄文焯『重修肅州新志』30 卷，乾隆元年 [1736]→3 冊，台北：台湾学生書局，1967 年.

世実：鄂爾泰等奉勅纂輯『大清世宗憲皇帝実録』159 卷，乾隆 6 年 [1741]→3 冊，台北：華文書局，1964 年.

高実：慶桂等奉勅纂輯『大清高宗純皇帝実録』1500 卷，嘉慶 12 年 [1807]→30 冊，台北：華文書局，1964 年.

雍宮：国立故宫博物院編輯 (1977-1980)『宮中檔雍正朝奏摺』32 冊，台北：国立故宫博物院.

乾宮：国立故宫博物院編輯 (1982-1988)『宮中檔乾隆朝奏摺』75 冊，台北：国立故宫博物院.

明清：中央研究院歴史語言研究所編輯 (1986-1995)『明清檔案』324 冊，台北：中央研究院歴史語言研究所.

- 匯編：中国社会科学院地理科学与资源研究所・中国第一歴史檔案館（2005）『清代奏摺匯編：農業・環境』北京：商務印書館。
- 新滿：中国边疆史地研究中心・中国第一歴史檔案館編（2012）『清代新疆滿文檔案匯編』283冊，桂林：广西師範大学出版社。
- 新檔：中国边疆史地研究中心・新疆維吾爾自治区檔案局合編（2012）『清代新疆檔案選輯』91冊，桂林：广西師範大学出版社。
- Bello, D. (2016) *Across Forest, Steppe, and Mountain: Environment, Identity, and Empire in Qing China's Borderlands*. New York: Cambridge University Press.
- Brophy, D. (2013) The Junggar Mongol legacy and the language of loyalty in Qing Xinjiang. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 73 (2), 231-258.
- Brophy, D. & R. Thum (2015) The Shrine of Muhammad Sharif and Its Qing-era Patrons. In: Jeff Eden (transl. and annot.), *The Life of Muhammad Sharif: A Central Asian Sufi Hagiography in Chaghatay*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, ÖAW, 55-75.
- Brophy, D. & T. Onuma (2016) *The Origins of Qing Xinjiang: A Set of Historical Sources on Turfan (TIAS Central Eurasian Research Series 12)*. Tokyo: NIHU Program Islamic Area Studies Department of Islamic Area Studies, Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo.
- Iguro, S. (2013) A Study of Agricultural Water Supply Technology in Eighteenth-century Northwestern China: Historical Knowledge and the Response to Desertification. In: Ts'ui-jung Liu (ed.), *Environmental History in East Asia: Interdisciplinary Perspectives*. London: New York: Routledge, 199-212.
- Kim, K. (2012) Profit and protection: Emin Khwaja and the Qing Conquest of Central Asia, 1759-1777. *The Journal of Asian Studies* 71 (3), 603-626.
- Nuri, Ö. (2014) Turfan Uygurlarının 1732 Yılında Doğuya Göç Etmeleriyle İlgili Bir Belge. *Uluslararası Uygur Araştırmaları Dergisi* 4: 65-70.
- Onuma, T. (2012) Promoting Power: The Rise of Emin Khwaja on the Eve of the Qing Conquest of Kashgaria. 『遊牧世界と農耕世界の接点：アジア史研究の新たな史料と視点』（『学習院大学東洋文化研究所調査研究報告書』57）学習院大学東洋文化研究所，31-60.
- Onuma, T. (2016) The Migration to Gansu: A Turfani Community in Guazhou, 1733-1756. In: Brophy & Onuma 2016: 13-37.
- Perdue, P. (2005) *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia*, Cambridge (Mass.): London: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Temir, A. (1951) Zwei Dokumente zur neueren Geschichte Ost-Turkestans. *Oriens* 4 (1), 81.
- Temir, A. (1961) Ein osttürkisches Dokument von 1722-41 aus Turfan. *Ural-Altäische Jahrbücher* 33, 193-198.

- Yakup, A. (2007) *Vacu* or *Gaju*? On a place name in an 18th century Uyghur document. In: H. Boeschoten & H. Stein (eds.), *Einheit und Vielfalt in der türkischen Welt*. Wiesbaden, 57-70.
- 国家文物局 (編) (2011) 『中国文物地図集 甘肅分冊』 上下, 北京: 測繪出版社.
- 濱田正美 (1991) サトク・ボグラ・ハンの墓廟をめぐって『西南アジア研究』 34, 89-112.
- 濱田正美 (1993) 「塩の義務」と「聖戦」との間で『東洋史研究』 52(2), 122-148.
- 堀 直 (1978) 18-20 世紀, ウイグル族の度量衡について『大手前女子大学論集』 12, 57-67.
- 井黒 忍 (2009) 雍乾時期甘肅河西地区的“界線”——開發, 環境, 紛争 安介生・邱仲麟(編) 『辺界・辺地与辺民 —— 明清時期北方辺塞地区部族分布与地理生態基礎研究』 濟南: 齊魯書社, 206-215.
- 河野敦史 (2013) 18~19 世紀における回部王公とベク制に関する一考察 —— ハーキム・ベク職への任用を中心に『日本中央アジア学会報』 11, 41-64.
- 香坂昌紀 (2004) 清代前期のジュンガル政策とその経済効果『東北学院大学論集歴史学・地理学』 37, 1-81, 2004.
- 小沼孝博 (2015a) アンカラ民族学博物館所蔵トルファン郡王家関連資料の調査『日本中央アジア学会報』 11, 61-71.
- 小沼孝博 (2015b) トルファン・オアシス社会の分断 —— 清とジュンガルの狭間で『歴史と地理』 686 (『世界史の研究』 244), 1-14.
- 佐口 透 (1986) 『新疆民族史研究』 吉川弘文館.
- 澁谷浩一 (2008) 1723-1726 年の清とジュンガルの講和交渉について —— 18 世紀前半における中央ユーラシアの国際関係『滿族史研究』 7, 19-50.
- 新免 康 (2005) ウイグル —— トゥルファンのイスラーム聖廟の歴史と現在 末成道男・曾士才 (編) 『講座・世界の先住民族 —— ファースト・ピープルの現在』 01 東アジア』 明石書店, 211-226.
- 新免 康 (2009) 『ターリーヒ・ラシーディー』 テュルク語訳附編の叙述傾向に関する一考察 —— カシュガルの歴代ハーキム・ベグに関する部分を中心に『西南アジア研究』 71, 111-131.
- 蘇北海・黄建華 (1993) 『哈密・吐魯番維吾爾王歴史』 烏魯木齊: 新疆大学出版社.
- 東亜同文会 (編) (1943) 『新修支那省別全誌 7 甘肅・寧夏』 東亜同文会.
- 上田裕之 (2009) 『清朝支配と貨幣政策 —— 清代前期における制錢供給政策の展開』 汲古書院.
- 玉努斯江・艾力 (2015) 察合台文的塔蘭奇文書 —— 《秃黑魯帖木儿麻扎志》考釈『西北民族研究』 2015 (3), 159-166.
- 趙 珍 (2005) 『清代西北生態變遷研究』 北京: 人民出版社.

(東北学院大学文学部)